

なか はら か せき

仲原化石



仲原化石はくじらの化石で、断崖約50m下の波打ち際にあり、岩につきささるような形で残っています。岩から露出している化石は、長さ60cm、幅30cm、厚み20cmほどで、全長10m以上もあるヒゲクジラ亜目の下あごの骨の一部であるとされています。城辺地区で確認されたクジラはこの1点で、詳細は明らかにされていません。宮古では他にシマジリクジラ化石が発見されています。



クジラまめちしき

よく名前を聞くクジラたちを簡単に比較してみました。

5m 10m 15m 20m 25m



シロナガスクジラ



ナガスクジラ



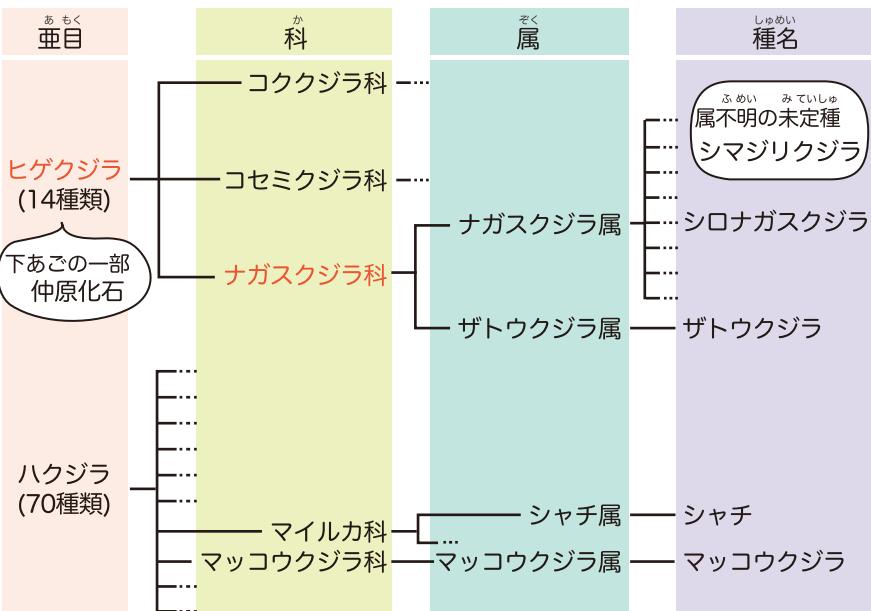
マッコウクジラ



ザトウクジラ



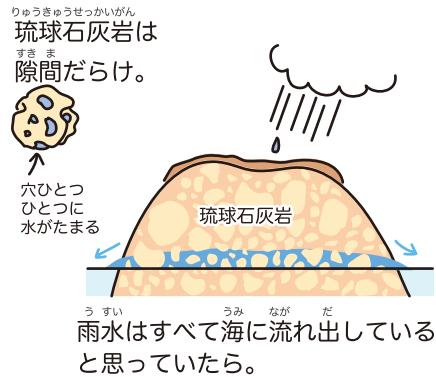
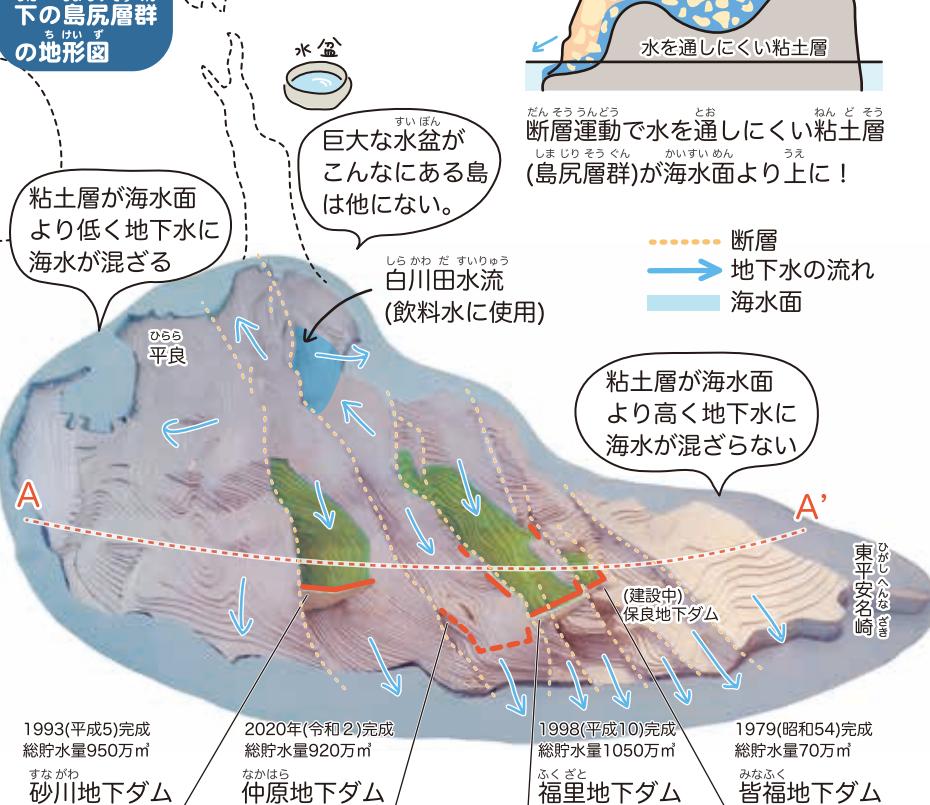
シャチ



宮古の地下水と地下ダム

宮古は水のない厳しい島だと思われていましたが、1972(昭和47)年の沖縄本土復帰後に行われた調査によって、地下に大量の水が蓄えられることがわかり、世界初の大型地下ダムをつくることで、生活や農業を安定して行うことができるようになりました。

琉球石灰岩の下の島尻層群の地形図

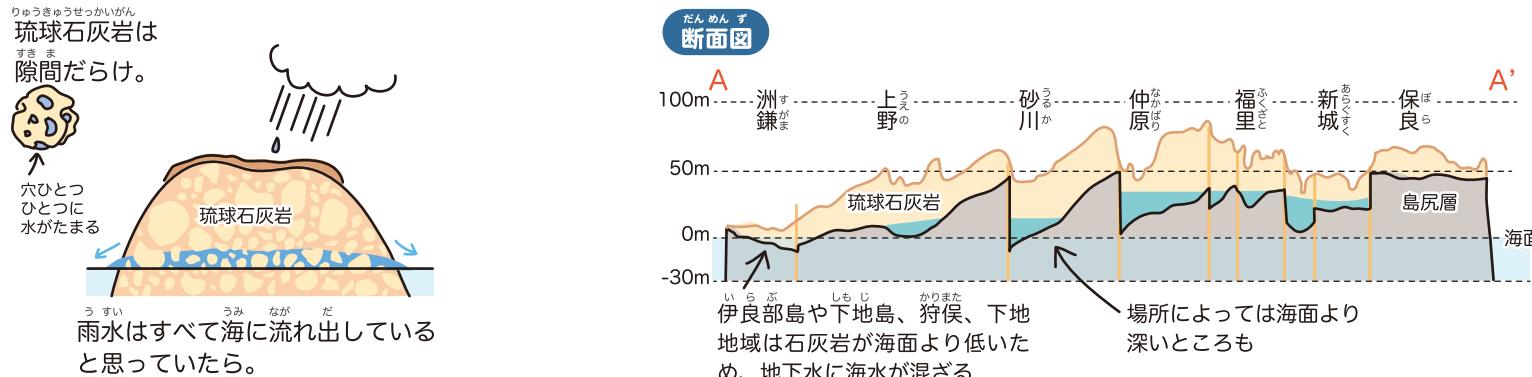


巨大な水盆がこんなにある島は他にない。

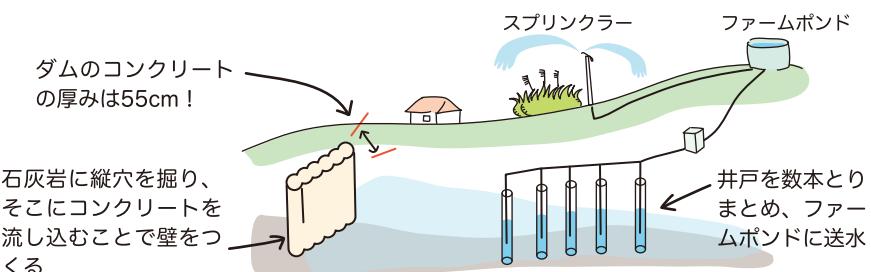
断層運動で水を通しにくい粘土層
(島尻層群)が海面より上に！

粘土層が海面より高く地下水に海水が混ざらない

断層
→ 地下水の流れ
海水面



地下ダム



宮古島市地下ダム資料館

資料館では、地下水のメカニズムや、地下ダムの仕組みを、映像や模型などをを使って分かりやすく解説しています。併設されている水位水質監視施設も歩いていける距離にあり、福里地下ダムの止水壁と、実際に堰き止められている地下水を見ることができます。



地下ダム資料館



水位水質監視施設

旧西中共同製糖場煙突

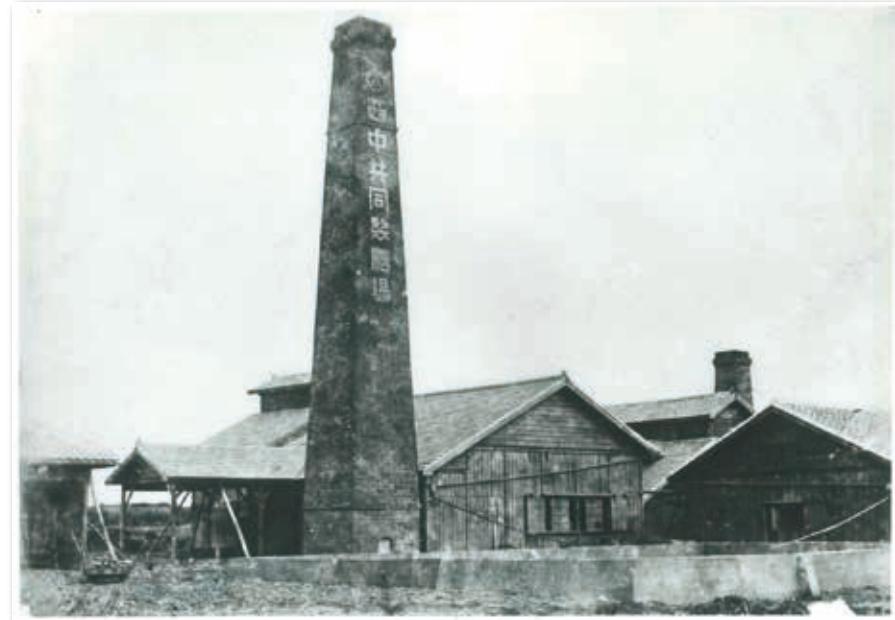
市指定史跡

2017(平成29)年11月22日指定

旧西中共同製糖場跡



旧西中共同製糖場跡は1942(昭和17)年に創設された製糖工場です。農家で組合を結成してお金を出し合い、建築資材は組合員が漲水港(現在の平良港)から運び入れるなど、並々ならぬ力を注いだといわれています。製糖場は2、3回操業しただけで、戦争で旧日本軍の強制接収にあい、操業中止に追い込まれました。現在はその煙突と冷却水施設の跡が残っています。



戦時中の西中共同製糖場

1881(明治14)

はじめてサトウキビが栽培される

1883(明治16)

黒糖が生産される

1884(明治17)

製糖技師 城間正安が宮古へ

1894(明治27)

沖縄県訓令で栽培が奨励される

1929(昭和4)

長中・皆福・花切に小型製糖工場建設

1931(昭和6)

台風で3工場とも全壊

1932(昭和7)

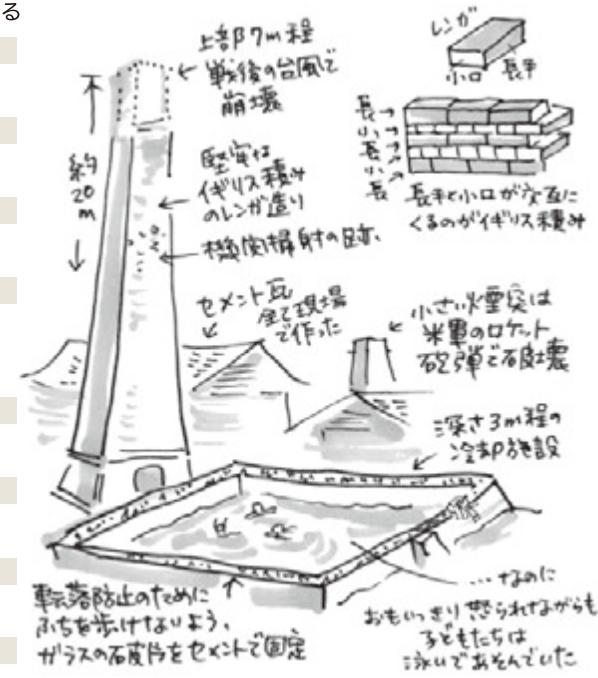
再び台風で全壊、廃業

1942(昭和17)

砂川と西中に中型製糖工場建設

1944(昭和19)

旧日本軍に強制接収 操業停止

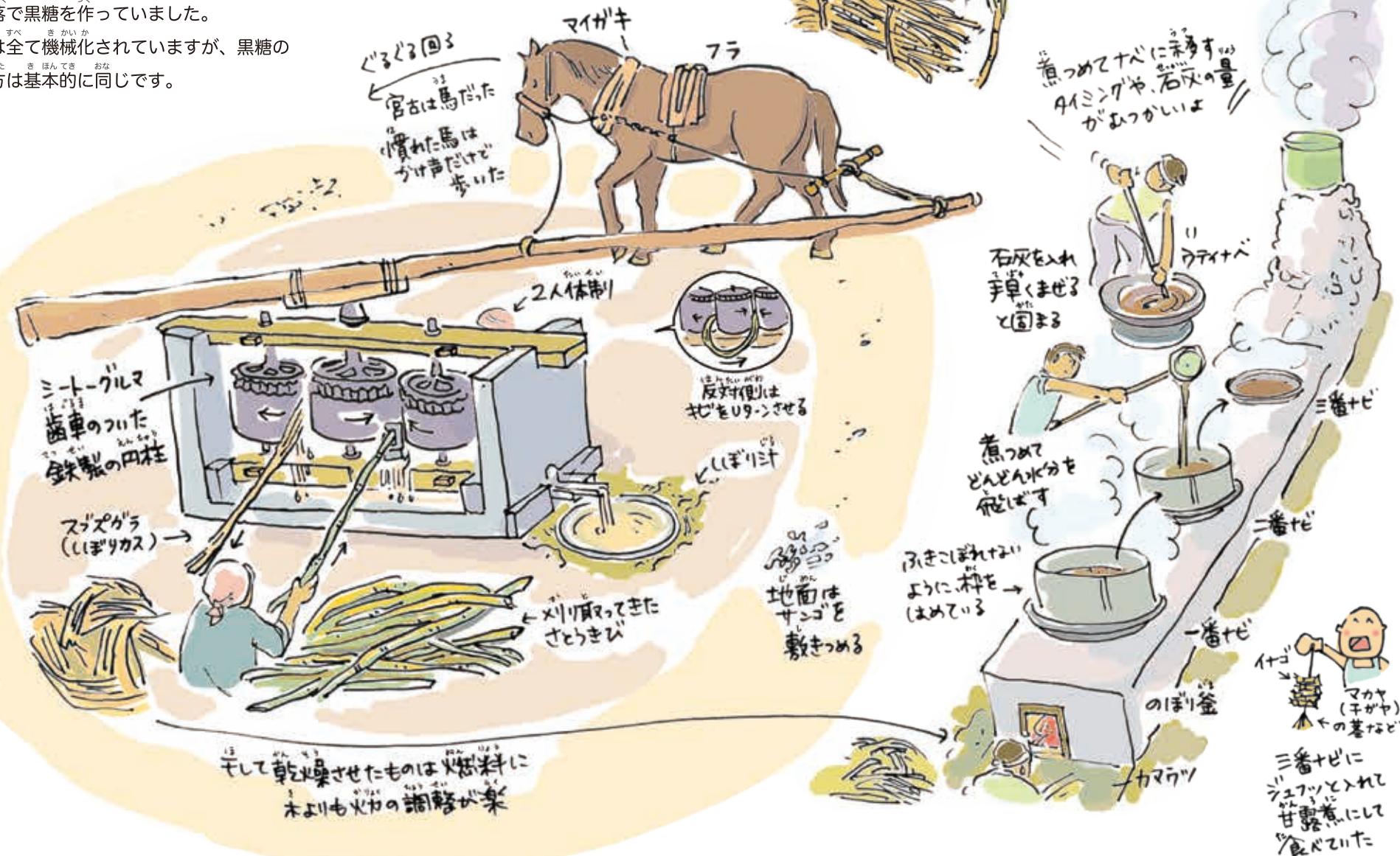


こくとう 黒糖ができるまで

せいとうこうじょうせいさん
製糖工場で生産するようになるまでは、

かくしゅうらくつく
各集落で黒糖を作っていました。

いますべきかいが
今は全て機械化されていますが、黒糖の
かたほんてきおな
作り方は基本的に同じです。



かみくししまい
上区の獅子舞



1892(明治25)年、人口の増加に伴い下里村から5つの集落
が分かれ、下里添村となりました。その際、下里村の長が村分
けの祝いとして2頭の獅子を贈ったといわれています。

上区の獅子舞は、十五夜に行われる豊年祈願祭で奉納される
など、集落の人々から大切にされている
伝統行事です。また、魔除け、厄除
け、区民の協和、豊作の守護神として
も信仰されています。



とうがにすざ
唐金兄

上区の獅子舞で踊るクイチャーの中に「唐金兄」という歌があります。歌
詞の中に「嶺沼」という地名が織り込まれており、古くからの集落独自の歌
であることを示しています。嶺沼は水場として利用されていた沼地でしたが
が、耕地整備などの影響を受け、いまは残っていません。

とうがにすざ
唐金兄(抜粋)

1.唐金兄が最初ぬ

出逢ますさやヨー(ヤイヤヌ)

ヨーイマーユヌ

出逢ますさヨー(ニノヨイサッサイ)

2.嶺沼ぬ ヤラブが下んどう

出逢ますさやヨー

ヨーイマーユヌ

出逢ますさヨー(ニノヨイサッサイ)

唐金はいい男という意味もある

昔、唐金兄という男がありました。
かれすほくほうみねた。彼の住む集落の北方の嶺に、
まっすぐにのびた1本の立派なヤラブ(テリハボク)が生える「嶺沼」という沼がありました。

ある日、唐金兄はそのヤラブの下で女性と出逢い、夫婦になりました。

ふたりは出逢った思い出の木を家の棟柱にし、残りで地機(機織り機)をつくりました。

ある日、妻が布を織っていると、ふと愛しい唐金兄のことが頭に浮かび、織り間違えてしまいました。失敗してしまったと悲しんでいる妻に、「なげくな、あわてるな」と唐金兄は励まします。

気を取り直した妻は、なんとか布を織り上げることができました。



城辺と人頭税

旧城辺庁舎の敷地内に、人頭税廃止の顕彰碑が建っています。また、城辺地域内には人頭税に深く関わった平良真牛、上原戸那、西里蒲の3名の碑が建つなど、人頭税廃止運動と城辺地域は深い関係にあります。



※総代 = 村長

人頭税年表

- 1609(慶長14) 薩摩侵攻。琉球王朝、薩摩の支配下に
- 1637(寛永14) 宮古・八重山に人頭税制をしく
- 1659(万治2) 年貢の総額を毎年一定額にする

男は粟、女は上布を糸めねばならぬ
毎日働いてもあさめされない…

度重なる暴風雨、えき病、熱病、大かんばつ
しかも…

着物は1年中1着だけ。
米どころか粟すら食べたことはない。
家は茅ぶきで、もうダメだ…
すき間だらけ…

- 1879(明治12) 廃藩置県にともない琉球は沖縄県に

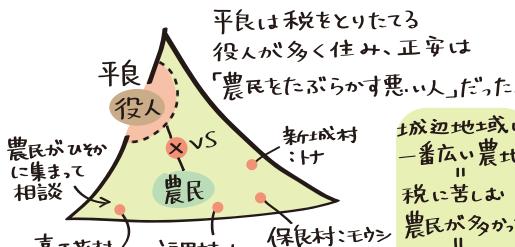
沖縄県になって薩摩の支配は終わったのに、人頭税は続く

- 1884(明治17) 城間正安、製糖技師として那覇から宮古へ赴任

次第に廃止運動が強まっていく

黒糖づくりを教えようにも、そんな余力はないぢやないか!
正安

- 1892(明治25) 中村十作、真珠養殖事業で宮古へ
- 1893(明治26) 人頭税廃止請願のため、代表4人が上京
- 1895(明治28) 請願書が国会で可決
- 1903(明治36) 人頭税廃止 (266年!)
- 1964(昭和39) 顕彰碑建立



宮古口→沖縄口→標準語
正安:通訳
十作:道案内&人脈
モウシ&カマ:農民代表
トナ&亀吉:るす番役
誰か一人でも欠けたら
請願はなしでなかつた

当時は飛行機もラジオもない。
宮古から一歩も出たことない、
宮古のことばしか話せない人たちが、
役人の妨害にあいながら島を出て、
舟船と列車を乗りついで東京へ
行くことは、ものすごく大変だった。
旅費は、農民のなげなしのカンペだった。

西里添・下里添・福里コース

新潟に宮古島！？

中村十作の生地、新潟県上越市板倉区稻増には、十作の業績を称えた記念館が建てられ、十作や人頭税廃止運動に関する資料などが展示されています。また、集落内には宮古島をかたどった記念公園が整備され、島田橋の親柱は宮古の石灰岩が使われています。このことをきっかけに1980年頃から宮古島市と上越市の交流が始まり、現在もお互いに訪問交流を行っています。



平安名崎灯台下の案内板には板倉町が載っている



中村十作記念館

宮古の琉球石灰岩を使った親柱

宮古島をかたどった記念公園

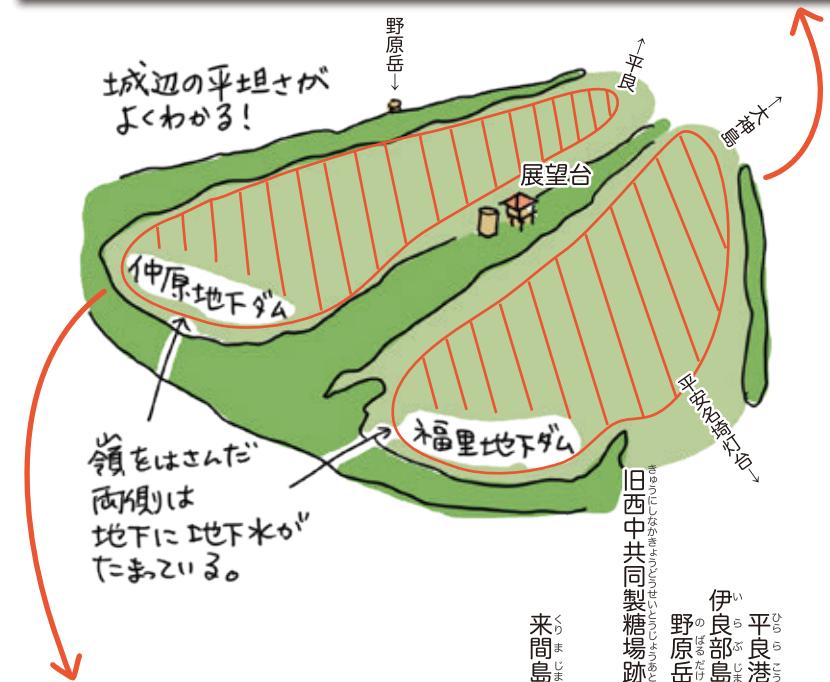
まい がー ご しん ばく しゅう へん しょく ぶつ ぐん らく
前井と御神木その周辺の植物群落



まい がー しも ざと そえ せい ぶ なが ま なん ぶ じゅうみん り よう どう くつ せん
 前井は下里添西部と長間南部の住民が利用した洞窟泉で、
 く と と たい へん ふ えい せい たて あな しき い ど かい ちく
 汲み取りが大変で不衛生なため、豊穴式の井戸に改築されて
 います。当時は道を挟んだ北側にウツバラ井がありました。
 とう じ みち はさ きた がわ がー
 湧き出る水量が少なく、汲み取るのに時間がかかり、ブー(芋
 ま う じゅん ばん ま
 麻)を績んで順番を待ったことから
 「ブーンムガー」とも呼ばれています。周辺はデイゴをはじめ亜熱帯特有
 しゅうへん あ ねつ たい とく ゆう
 の植物群落があります。



くすく へ いち ほう もり てん ほう たい
城辺を一望できるいこいの森展望台



比嘉・長間コース

← 散策コース

所要時間: 約1時間
(約16km)

やりみち



にす み う たき

西銘御嶽



西銘御嶽は、西銘の嘉播親が居を構えた西銘城の跡地といわれています。北側は断崖に面し、周辺は水田が広がっていました。全体の規模ははっきりしていませんが、城壁らしき石垣もみられ、青磁片などが広範囲に見つかっており、井戸もふたつ残っています。嘉播親は、炭焼太郎ともいわれ、後に長女が宮古を統一する目黒盛を生み、次女の於母婦が飛鳥爺と結ばれています。



飛鳥御嶽の植物群落



西銘城主だった飛鳥爺が祀られる飛鳥御嶽の植物群落は、御嶽林として古くから手付かずで残された原生林です。シマヤマヒハツ、ナガミボチョウジ、ヤブニッケイ、タブノキ、オオバギ、ハマイヌビワなどがよく見られ、特にモクタチバナが多いのが特徴です。さらに野鳥の営巣地や周辺畠地の防風林、そして地域住民の信仰対象として、古くから地域の人々に大切にされています。



とうびとうりやしゅう もの がたり 飛鳥爺の物語

むかし　むい　すん　むら　ま　とくがに
昔、箕の隅という村に、真徳金
おどこ　ゆうもう
という男がいました。「その勇猛
とら　はや
なさまは虎のようで、その早さは
とり　い
飛ぶ鳥のよう」と言われるほど、
ぶ　ゆう　すぐ　あし　ゆみ　めい　じん
武勇に優れ、足が早く、弓の名人
でした。

その頃、西銘城主の西銘按司
に、於母婦という美しい娘がいました。
した。跡継ぎがおらず良い婿はない
ないかと思っていたときに真徳金
のうわさを聞きつけ、於母婦の婿
にどうにかして迎えたいと考えました。

そんなおり、村の神女が「一斗
の餅をくれたら真徳金を呼び寄せ
てみせる」と言うので、任せてみ
ることにしました。すると、老夫
婦は箕の隅村の子どもたちに餅を
配り、これは神様からのお告げだ
と言って、「西銘按司の娘、於母
婦は月に照り栄え、花の匂いのす
る可愛い娘だ。飛鳥真徳金とは天
が決めた夫婦で、この夫婦は天を
照らし、島を覆うほどに栄える
ぞ」という歌を歌わせ、流行らせ
ていきました。

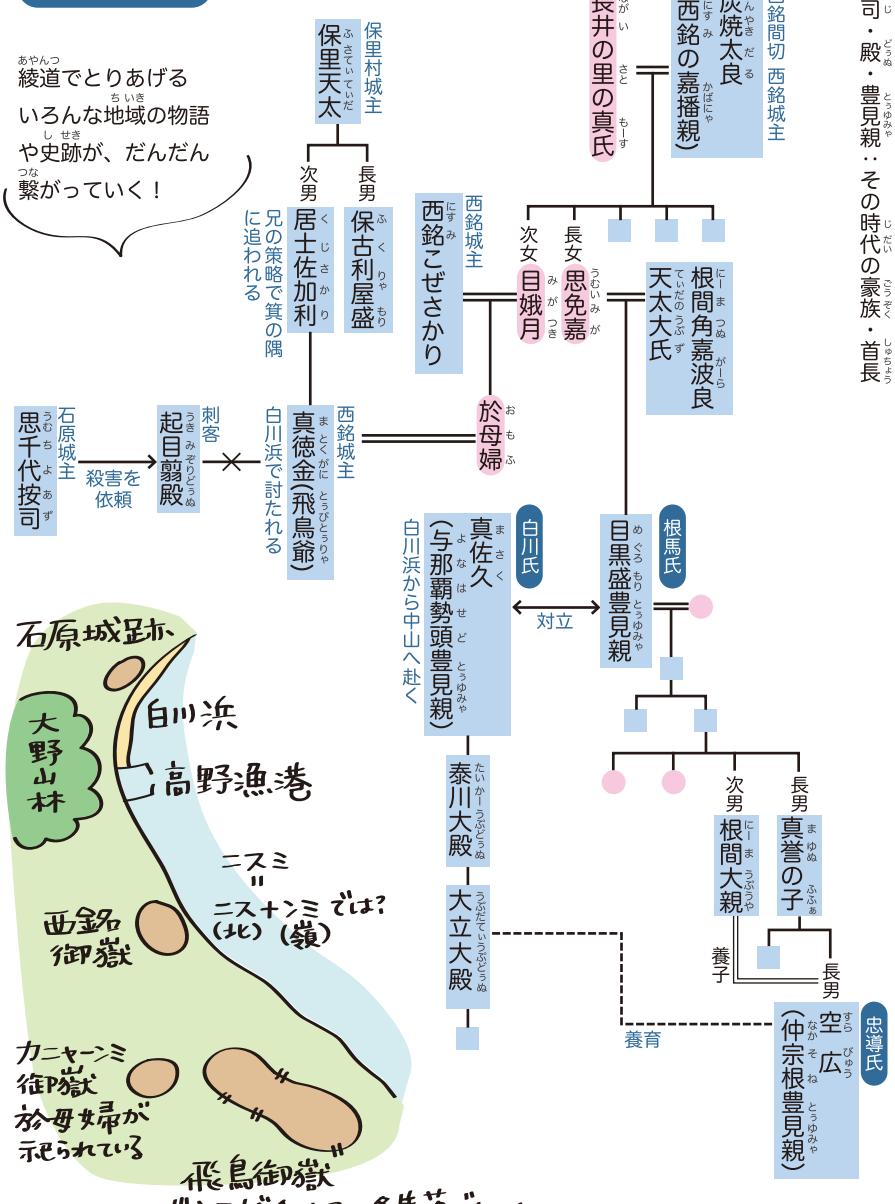
その歌を聞いた真徳金は、神様
たゞ
お告げならばと西銘村を訪ね、
うわさどお まんぞく
噂通りの良い男に満足した按司
は、娘と結婚させました。按司の
し こん
死後、西銘城主となった真徳金
ひと ひと とうびとうりや した
は、人々から飛鳥爺と親しまれ、
し だい りょうち かくだい ます
次第に領地を拡大し、飛鳥城も築
きます。

いせい ふ あん いだ
その威勢に不安を抱いたのは西
いさ ら
銘村の西にある石原城でした。城
うむ ち よ たびたびりょう
主の思千代按司は飛鳥爺が度々領
いき おか
域を侵していたので、なんとかし
う づか な だか
て討ちたいと思い、弓使いと名高
うき み ぞりらぬ しがく やと
い起目鷹殿を刺客に雇いました。

そしてついに、飛鳥爺は白川浜
で起目翦殿に弓の勝負を挑まれ、
策に負けて両目と胸を射抜かれて
殺されてしまいました。

飛鳥爺の死後、西銘村の集落は
すいたい じゅうらく
衰退してしまいます。その後、こ
ち おうらい ご
の地を往来する人々が次々と病に
かかって死んだので、飛鳥爺のた
たりではないかという噂が広が
しきあと うわさ ひろ
り、城跡にコーパナ(香と米)を捧
げ、飛鳥爺の亡魂を慰めるよう
なりました。

とうびとうりや かんけい ず 飛鳥爺の関係図



にすみむら いさらむら むいすむら こりゅうきゅうき つたむら
※西銘村、石原村、箕の隅村は古琉球期にのみ伝わる村

やま がー

山川ウプカー



山川ウプカーは、山川集落から北へ500m程のところにある湧泉です。『雍正旧記(1727年)』に「山川但洞川。掘年数不相知」と記されており、古くから知られていますが、いつ頃造られたのかは分かっていません。

山川ウプカーは水量が豊富で、水田の水としても利用され、大切にされてきました。



宮古有数の水田 ナガマダー

ウプカーの豊富な水は崖下に肥沃な土地を形成し、通称長間田と呼ばれる水田が広がっていました。宮古の中でも有数の米の産地で、琉球王府の尚真王が仲宗根豊見親に与えた

仲宗根豊見親が尚真王より与えられた土地を記した木刻



『木刻拌領地之図』：宮古島市総合博物館展示品より

1960年頃のナガマダーの水田の様子



『Military Geology of the Miyako Archipelago, Ryukyu-Retto 1960』
宮古島キッズネット

